

厚生労働科学研究費委託費（革新的がん医療実用化研究事業）

委託業務成果 報告書（業務項目）

大腸がん肝転移切除例に適した新規抗がん剤を用いた術後補助化学療法の研究

担当責任者 絹笠祐介 静岡県立静岡がんセンター 大腸外科部長

研究要旨：大腸癌肝転移治癒切除後の患者に対する術後補助化学療法の有用性に関しては、現在JCOG0603試験にて研究中であり、当院でも積極的に登録し参加している。一方、切除不能大腸癌肝転移症例に対する標準治療は化学療法である。近年の化学療法の進歩によって、切除不能大腸癌肝転移に対して化学療法後のconversion surgeryの有効性が報告されつつある。そこで、当院でのconversion surgeryの長期成績を検討した。

A．研究目的

切除不能大腸癌肝転移に対して化学療法後のconversion surgeryの有効性が報告されている。そこでconversion surgeryの長期成績を明らかにすること、術前因子から予後因子を検討することを目的とした。

B．研究方法

2002年9月から2013年3月に当院で施行した大腸癌肝転移手術422例中、術前化学療法施行は87例。そのうち化学療法前に肝因子のみで切除不能と診断した22例に対するconversion surgeryの長期成績を検討。次に背景因子、原発巣因子、肝転移因子についてそれぞれlog-rank検定を行い予後因子について検討した。

（倫理面への配慮）

患者が十分な理解を得られるように説明を行い、承諾が得られれば署名していただいた上で手術を施行しており、倫理面の問題はないと考える。

C．研究結果

年齢中央値:63歳(33-78)、男/女:18/4例、同時性/異時性:16/6例。H1/H2H/3:1/15/6例、化学療法前肝転移個数中央値:8個(1-14)、最大肝転移腫瘍径

中央値:63mm(20-171)、各症例における肝転移腫瘍径平均値の中央値:30mm(12-171)。術前化学療法はCPT-11/L-OHPを含むレジメン22例、分子標的薬を12例に施行。治療効果はCR/PR/SD/PD:0/19/3/0例。化学療法による腫瘍縮小率:47%(19-96)、術前CEA中央値:9.0ng/mL(1.7-167.4)。長期成績は、1/3年RFS:50.2%/27.9%、1/3/5年OS:94.7%/70.1%/39.0%、MST(生存期間中央値):49ヶ月(観察期間中央値32ヶ月)。予後因子は、肝転移腫瘍径平均値 20mm(3年OS/MST:51.4%/37ヶ月 vs.80.8%/71ヶ月,p=0.04)、術前CEA値 10ng/mL(3年OS /MST:30.0%/31ヶ月 vs.83.3%/71ヶ月,p=0.01)であった。肝転移腫瘍径平均値 20mmの肝転移は、肝転移個数中央値:10個(6-14)であった。

D．考察

肝因子のみで切除不能となった症例に対するconversion surgeryの長期成績は比較的良好であり、conversion surgeryは有効な治療法であることが示唆された。予後因子は肝転移腫瘍径平均値 20mm、術前CEA値 10ng/mLであり、これらの症例に対するconversion surgeryは慎重な対応が必要である。

E .結論

conversion surgeryで比較的良好な長期成績が得られる患者集団が存在することが示唆された。